

20 世紀から 21 世紀の懸け橋の 10 年間の 「喫煙と内分泌・代謝」

中尾 一和*

医学や内科学の専門分化の進む中で、内分泌代謝学領域の研究は、喫煙の全身的作用を研究するのに最適の、また唯一の領域になりつつある。内分泌代謝臓器は、従来の古典的内分泌代謝臓器にとどまらず、全身の臓器や器官が内分泌代謝機能を有することが明らかになり、内分泌代謝疾患の疾患構成がおおきく変貌しようとしている。従って、1996 年から 2005 年に至るこの 10 年間の「喫煙と内分泌・代謝」の主要研究テーマも、従来の視床下部下垂体疾患、甲状腺疾患、副甲状腺疾患、副腎疾患、性腺疾患などの内分泌代謝疾患から、生活習慣病やメタボリック症候群の増加が注目される中で、「喫煙と common disease」即ち「喫煙と肥満症や糖尿病」や「喫煙と生活習慣病やメタボリック症候群」に大きくシフトする傾向にある。そして、関連する新領域としては「喫煙と再生医学」に

関するものも実施され始めており、今後の発展が注目される。

これらの研究は「喫煙における意義」のみならず関連研究領域から国際的にも高い評価を受けていることをここに強調しておきたい。

また過去 10 年間で、内分泌・代謝領域で一貫して国際的に高い評価を受けた研究のひとつは、牛首教授らの「喫煙とプロスタグランジン受容体」に関するものである。喫煙における意義についての解明にはまだ少し時間を要すると推測されるが、その成果の進展は国際的にも誇るべきものである。

以上のように、20 世紀から 21 世紀の懸け橋の 10 年間の「喫煙と内分泌・代謝」領域の研究は、古典から新世界への飛躍の準備期間、あるいは方向性の発見と出発の期間と位置付けることが出来る。

* 京都大学大学院医学研究科内分泌代謝内科